

医療の質・安全学会設立

医療者・医学者だけでは質と安全は守れない！

取材・文／尾崎雄

2005年11月26日、東京で「医療の質・安全学会(JSQSH)」が設立された。医学の枠組みを超えた幅広い英知を医療の質と安全の向上に役立てるための学際的・複合的な学会である。目的は、(1)医療の受益者である患者の視点に立ち、(2)医療関連分野だけでなく工学、法律、心理、経営科学など幅広い分野の専門家が参加する学際的な取り組みにより、(3)医療における安全科学をシステムとして確立して医療の質を高め医療事故を防ぐことである。理事長に高久史磨自治医科大学学長、副理事長に上原鳴夫東北大学大学院教授が選ばれた。

人間は間違いを犯す存在であるからこそ

役員、評議員には品質管理、情報システム、社会学、医療事故の専門弁護士、ノンフィクション作家ら医学以外の幅広い分野から専門家が参加した。学会設立に合わせて開催された記念国際シンポジウムでは“To err is human”(人間は間違いを犯す存在である)という共通認識に立って、医療・医学の世界に閉じこもる蛸壺的な発想のままでは、医療の質と安全を保つことは難しいという危機感が溢れていた。

基調講演は「患者安全の向上——グローバルな視点からの課題」。ジュネーブ大学から駆けつけた演者、D. Pittet 教授は、安全な医療を受けることは「患者一人ひとりの権利」だと語り、WHO

は2004年10月、世界の健康・保健関連省庁、安全の専門家、患者安全のための公的機関、学会、医療関連団体や消費者団体が一堂に会する組織 World Alliance for Patient Safety(WAPS)を設立したものの医療事故や防止システムの故障が繰り返されていると訴えた。

設立記念特別講演「患者の安全と医療の質について——21世紀の新しい医療を目指して」で、尾身茂 WHO 西太平洋地域事務局長は、次のように指摘した。医療の質が問われ医療事故が増える原因の一つは、医学・医療の発展を根底で支えてきた『生物医学的方法論』にある。その結果、この方法論の対象外の生命現象、例えば病む人の心理的側面(病患)などは、いささか無視されてきたこと。それが問題である。

医療界は常識が通じない「不思議な世界」

パネル討議「21世紀の医療を創造するために——医療の質・安全における学術研究の意義」では、例えば、医薬品の場合、土屋文人東京医科歯科大学歯学部附属病院薬剤部長が指摘するように「『創薬』の名のもとで『物』の研究に没頭し、臨床現場を意識することはほとんどなかった」ため、「使用の安全」の概念が生まれなかった。このため「従来の方法論の限界を認識し、『疾患』をも考慮した学問の確立」が必要とされている。「医療は科学になっていないから医療ミスが起きる」(武田裕



大阪大学大学院教授)という厳しい自己批判もあった。それは普遍化技術を軽視してきたからであり、医学・医療の枠を超えた各分野における専門家との交流と協働が欠かせない。

日本品質管理学会の会長を務める飯塚悦功東京大学大学院教授は、医療界は産業界の常識に照らすと「不思議な世界」だという。その第1は「質」概念の希薄さである。「経営・管理における質の重要性和顧客志向(患者中心)」が分かっていない。第2は「個人的能力への依存」だ。医師、看護師ら個人が一所懸命やっても報われないどころか事故が発生するという不思議。第3は「普遍化技術の軽視」である。「目的達成のためにどうすればよいか分かっていることを自然体で実施するための方法論」がないがしろにされている。第4に「改善・改革へのインセンティブのない」ことだ。

質と安全を向上するための 6つの要件と4つの原則

産業界においてサービスの質と安全を確保するための要件は「動機」「思想」「技術」「マネジメント」「ひと」「運動論」の6つである。これらを医療の質と安全性の向上に生かすためには医療界だけでなく、社会が保有する技術、すなわち「社会技術」が必要だ。それを医療に導くための4つの原則は次

の通りである。

(1)「患者本位」医療提供側からの価値観重視を改めて患者中心の医療へ、(2)「システム志向」個人の献身と悔悟からシステムによる保証と改善へ、(3)「全員参加」専門家の独り相撲から全員参加の取り組み、(4)「失敗の研究」過去の責任追及から将来に向けた教訓の獲得へ——である。

この取り組みを進めていくためには、「社会学や経済学、法学や労働安全衛生などさまざまな分野の知識や技術の導入や応用が必要」(嶋森好子京都大学医学部附属病院看護部長)である。他のシンポジストからも「人間の専門家」やマネジメント・経営、航空・鉄道や国家レベルでの資源配分の専門家およびマスメディアなどからの多様な人材の参加を求める声が相次いだ。

「日本の医療は医療の提供者が抱え込んできたが、これからどうするかは医療以外の他の関係者が考えて欲しい」(上原鳴夫東北大学大学院教授)という意見も出た。医療の質と安全性を高めることができるかどうかは閉ざされた医療をどこまで開いていくことができるのかにかかっている。

なお、同学会による第1回学術大会(高久史磨大会長)は、2006年11月23・24日に東京で開催される予定である。

詳しくは、同学会ホームページ <http://qsh.jp/> を参照のこと。